

動物展示施設 NIFREL におけるワオキツネザルのオス集団の社会関係

小栗 優実

【序論】 野生下のヒト以外の霊長類では、オスが母集団を移出した後、オスのみで集団を形成することがある。オス集団は、その種におけるオスの行動特性や、メスとの接点がないという環境によって、雌雄混合集団とは異なる特性を持つと考えられる。しかし野生下でのオス集団の報告は真猿類などの一部の種に限られている。原猿類のワオキツネザル (*Lemur catta*)は、全てのメスが全てのオスに対し優位であるという特徴を持つ。交尾季になりメスが発情すると、オスはテストステロン量が上昇し、攻撃行動が増加する。そのため、いくつかの動物園では攻撃交渉を避けるためにオスのみで飼育することがある。本研究では、飼育ワオキツネザルのオス集団を対象とし、以下の3つを目的として、行動観察を実施した。①飼育下におけるオス集団の特性を明らかにすること。②オス集団の性的行動を記録し、発情の条件を検証すること。③一部の個体を集団から隔離することがオスの社会関係に与える影響を明らかにすること。

【方法】 生きているミュージアム NIFREL (大阪府吹田市) で展示されている10頭のオスからなるワオキツネザル集団を対象とし、2019年9月4日から11月28日までの39日間観察を行った。1セッション10分の個体追跡法を用いて直接観察し、他個体との近接には2分ごとの瞬間サンプリング法を、他個体との敵対的交渉や親和的交渉、その他の行動には全生起法を用いて記録を行った。総観察時間は99.5時間であった。一部の個体に隔離措置があったため、展示個体に応じて観察期間を8termに分けた。

【結果と考察】 ①明らかな順位変動が見られなかった9月11日から10月31日のデータをもとに、集団内の順位を決定した。10頭の中で三竦みの関係があるやや非直線的な順位関係であったが、複雄複雌集団におけるオス間の順位関係との明らかな差はみられなかった。2頭間で敵対的交渉が双方向に起こり、優劣関係が不明確だったペアがみられた点では先行研究と異なっていた。複雄複雌集団では、メスが全てのオスに対し優位であり、メス同士、またはオス同士で頻繁に近接がみられるが、本研究においては、オス間の近接や grooming の親和的交渉の頻度と、ペア間における順位差との関連はみられなかった。ほとんどのオス間で頻繁に親和的交渉を行っており、親和的交渉を行う相手に大きな偏りがみられなかったことが本研究のオス集団の特徴としてみられた。②個体追跡中に対象個体のペニスの勃起がみられたのは、10月23日から観察最終日の11月28日の間であった。この期間は北半球におけるワオキツネザルの交尾季である10～11月にあたる。複雄複雌集団ではメスの発情に伴ってオスのテストステロン量が上昇する。本研究ではメスのいない環境においてオスの発情がみられたことから、メスがいない短日条件によってオスの発情が起こることが示された。ペニスの勃起は10頭において少なくとも1回ずつ観察され、さらにオス個体同士での性器の sniffing にそれぞれが1回以上関わっていた。性器の sniffing は、複雄複雌集団ではオスがメスに対して発情状態を確認するために行う行動である。10頭のうち1頭は同じ展示エリアのカピバラに対してペニスを押しかけて pelvic thrust を行うことも観察された。このことから、メスがいない環境では繁殖にかかわる行動がオス同士や他種の動物に対して表出しうることがわかった。③11月以降には個体の攻撃行動が増加したことを理由に一部の個体の隔離が行われた。term2と11月の約1か月間の term3～8 では他個体へのテールウェービングの頻度の急激な増加、marking の増加、不安感情の指標である scratching と self-grooming の増加がみられた。term3以降では集団内の順位の変動がみられ、隔離個体が展示個体と合流した直後に順位が落ちやすいことが示された。順位の変動や上記のような行動の変化の背景には、短日条件によってオスのテストステロン量が上昇し攻撃性が高まったことに加え、個体の隔離によって社会関係の再構築が起こったことが考えられた。(比較行動学)